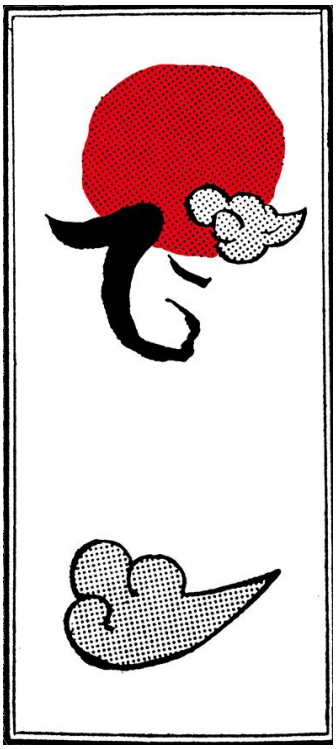

第８號
月　１　回　發　行
ひの心を繼ぐ會
〒791-0510
住所:愛媛縣西條市
丹原町丹原 50-1

領　　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は國家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（三）　（大和世界の建設）

古事記　はじめに　（三）

眞床追衾（まとこおうふすま）とエデンの知恵の樹の果實（み）

竹葉　秀雄

「人類が地球上に發生してから百萬年、他の動物とあまり違ふところはなかつたが、三萬年前頃から、竹や木を削り、石を磨いて環境を支配しはじめた。そして、ここ三百年間急速に科學が發達して今日の文明をきたすにいたつた。人口はやがて七十億から百億に達するにいたるであらう。食糧が問題になる。そして、一方、オートメイション化、コンピューター化は高度に進んで少數の人達が最高度化した技術を握つて、大衆は奴隷化し、食物と物と心の貧困をきたし、何れの日か、この大衆は激怒して、この少數の支配者をみな殺しにするかも知れない。その結果はもう技術を知つてゐる者はなく、大衆同士また相爭ふて殺戮し合ひ、遂に百萬年以前に後もどりするにいたるかも知れない。」

以上は、英國の歴史哲學者トインビーが「對話」（毎日新聞連載）の中に述べてゐる一節を要約したのであるが、これを讀んで私は、ふと、記紀の中にある〝眞床追衾（まとこおうふすま）〟や〝天磐船（あめのいわふね）〟のことを思ひ、かつて人類は、現代以上に科學文明の進んだ時代をもつてゐたのではないか。その文明が物質機械文明のみ發達して、その結果、公害や鬪爭が極度に達して、遂に破局をきたし、三萬年以前の原始の狀態にたちかへつたのではないか。また所謂ミュー大陸とか、レムリヤ大陸、アトランチス大陸とかがあつたのかも知れない。それが氣候の變化や地殼の變動で、滅亡し、その名殘りが、〝眞床追衾〟高度の飛行服や、〝天磐船〟堅牢な宇宙ロケットにあるのではなからうか。また、舊約聖書（きゅうやくせいしょ）にある「禁斷の實」の神話も、本來神が人間に與（あた）へた知恵が惡なる筈はない。ただこれが知識萬能となり、技術偏重、物質文明の極度の發達の結果、人類破局の歴史があつたために、「智恵の木の實」を食べることを警（いまし）めたものではないか。ノアの洪水、バベルの塔、みな一連の、天の理法に背いた文明に對しての神の刑罰の神話で、人類は發生以來幾度も過ちを繰り返してきてゐるのではないかなどと想像を逞ましくするのである。トインビーは人類發生以來百萬年と言つてゐるが、現在の人類學者は最近十年間に、人間の發生はそれまでせいぜい六十萬年前と言つてゐたのが、化石の發見によつて、百八十萬年となり、二百萬年を證明（しょうめい）し學會（がっかい）で認められるにいたつたのである。日本書紀の神武紀の中に「天祖の降跡りまして、以て今に逮ぶまで一百七十九萬二千四百七十餘歳なり。」と、餘歳まで附して明かに記せられてゐる。先年まで進歩的文化人學者と名乗る連中は、人類發生は六十萬年以後であるのに、このやうな荒唐無稽なことを記してゐる日本古典は一笑に附すべきものと論じてゐたのである。何の進歩的文化人ぞ。考古學、人類學はかへつて漸次日本神典の眞實を實證していきつつあるのである。考古學、人類學のみではない。物理、化學の發達も、陰陽の二原理、その奥の宇宙エネルギー、その高度の波長から發する光子エネルギー、――物への轉化――、八價元素の法則と、原子核を廻る陰電子及び大陽を廻る

地球の右旋、天之御柱を見立てての「美斗能麻具波比」に岐美、陰陽二神の、右旋左旋、奇偶、方圓の數の哲理、ここより演べられた「八雲の歌」の神歌に見る、八卦、洪範九疇の政治道德の神理。物理科學から、天文數學の研究はいよいよ、神典の眞理眞實を明らかにし、儒教、佛教、基督教など、また各々この道を明らかにする。慈雲尊者の「神儒偶談」を見よ、伴林光平の「本是神州清潔民」の詩に見よ、山鹿素行の「中朝事實」、山崎闇齋の「垂加神道」に見よ、水戸學に見よ、吉田松陰に見よ。基督教の佐藤定吉氏の「日本とは如何なる國ぞ」に見よ。粹然たる正氣をもつて、眞に道を求め、記紀を中心として其の他の日本古典を見るならば、道は自ら瞭然として來るであらう。中庸の書で謂ふ「小德は川流し、大德は敦化す」宇宙生命の實相、諸法實相の佛教の眞實義など、宗教、道德、政治、科學などが一より發して一に歸してゐる實相が、日本に顯現してゐることを識るであらう。ただ、現代の掘り出しものをもつて、ただそれだけをもつて古典を否定し、中國、韓國の文獻を主としてもつて、邪馬臺、卑彌呼論をたたかはして終始し、――それも一應よろしいとし――、齷齪として跼まり困んで、雄大、深淵なる日本古典を見やうとせず、宇宙の理法、神の教示を觀やうとしない。近世最大の歴史哲學者、英國のトインビーさへ、「この人類の進みつゝある破局を救ふのは、伊勢の皇大神宮を總本心とする神道である。」と述べてゐるではないか。（以下次號）

第一章　農の哲學的考察
～第三節　農本生活　第二項　本末關係～

菅原　兵治

かゝる意味より農本思想の何たるかを知らんと欲せば、先づ本と末との關係を明かにせねばならぬ。然らば「本」とは何ぞや。――之に對する解說は、「末ではないもの」といふ外はない。由來東洋的教學に於ては、深毅なる體得內證を重んずるが故に、西洋學的に劈頭に其のものゝ定義を示すといふやうなことはしない。――實はしないのではなくて、東洋流の教學に深く浸れば、なし得なくなるのである。なすことを欲しなくなるのである。定義以上のものを求め、定義の言辭的表現位では滿足出來ないのである。「曰く謂ひ難し」とか「不識」とかいふのは決して高踏的否定的な言辭ではない。「啞子苦瓜を喫する」底の言はんとして言ひ得ざる識得の滿ち切つた狀態である。之と同樣で「本」とは何ぞやといふことも輕薄に定義を下して喜んで居られる類のものではない。强ひて說述するならば、末に走る勿れとでも言ふ外はない。然しそれでは何が何やら分らぬ、もう少し親切な說明はないかといふならば、許されたる道は幾つかの事例を擧げて、之を本の立場より見れば如何なるか、末の立場より見れば如何なるかといふことを示し、其の間から朧げながらも農本生活の色調を明かにして見ることである。以下些か冗漫の嫌ひはあるが此の意味に於て事例によつて說述することゝする。

「こと」と「ことば」

私共人間の生命活動が外的に表現する時に「こと」として現はれる場合もあり、「ことば」として現はれる場合もある。「こと」とは事實若しくは實行としての表現であり、「ことば」とは「こと」の葉（端）であつて言語若しくは文字による表現である。眞箇に生命の本源――卽ち「誠」より發したものならば、其の場合によつて或る時は「こと」の形式を以てして默々として之を實行し、或る時は「ことば」の形式を以てして滔々百千萬言を言に文に出すも共に尊い價値のあるものである。然し其の兩者を比較的に言ふならば「こ

と」が本であつて「ことば」が末である。かかるが故に、農本生活に於ては、何れかといへば、「ことば」よりは「こと」を重んずる。由來農家の人々は、常に物言はぬ土地と作物、言葉の通ぜぬ家畜を相手にしての仕事にいそしむが故に、人を相手に雄辯を振撒く職業とは異るものがある。稲田や畜舎の前に立つて、稲作栽培法や農村振興論に就いて如何程蘇張の大雄辯を振つた處で稲は伸びない。豚は肥らない。それよりは親切に稲田の除草をしてやる、——豚に飼料をやる、——此の「こと」のつとめの方が役に立つのである。だから農民が口下手なのは無理からぬことである。篤農家の研究會なども、之を一堂に會して言辭の末のみでの發表を重んずると、何時しか篤農家といふ雄辯家をつくることに墮してしまひ勝ちである。又、農民の實生活に關する報告を官廳式に文書のみによつて要求し、それによつて成績を決するに至ると、村役場は何時の間にか印刷物製作所と化してしまふ嫌なしとせぬ。最明寺時頼や水戸黄門や、古くは支那の堯帝等の農村行脚も、要するに此の弊を救うて農村農民の「こと」そのものを見やうとしたものではあるまいか。かくて農生活に於ては、「ことば」よりも「こと」を重んずるを本體とせねばならぬ。

情愛と理智

之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を樂しむ者に如かず。吾々が或る事物に對して態度を決する場合に、其のものを好むとか、樂しむ(樂ふ)とかいふ情意的好樂の作用が根本で、之に對する理智的な説明は末である。恰度松の木の根からは松の葉が繁り、櫻の木の根からは櫻の花が開く樣に、理論的説明といふものは畢竟己が好樂する處を説明すべく生じて來たものである。だから酒の好きな人は酒に理論を附け、お茶の好きな人はお茶に理論をつけ、肥料商は金肥の使用に理論をつける。要するに情意が本で理智が末なのである。だから「本」の原理に立つ農村生活に於ては何れかといへば理智よりも情意、情愛を重んずべきである。

一體都會は、大きくなればなるほど、其處に集つてゐる人々が「群集」の程度を越えていないといつても過言ではない。隣家に誰が住んでゐるのかすらも分らぬのが都會の生活である。まあ同じ列車に乘込んだ乘客の關係以上のものではないといつてよからう。さういふ隣人同士の關係に於て濃かな情愛の交際などといつた處で、三月に一回宛引越しをするといふ有樣に於ては仲々さうばかりは行きかねるであらう。かくて結局都會生活はともすれば、「ことば」の交際になり勝ちなのである。之に對して農村は、祖先以來幾代幾十代の間、其の居を變えず隣同士、互に家族同樣の親しさで生活して來てゐるのである。現行の村まではさう行かなくとも、部落(これが眞個の日本的の自然村落である)の生活では確かにさうした親しさがあるのである。其の村の生活に於て、理論的な單なるイデオロギーや何々イズムの宣傳だけでは事は運ばない。農村に於ては演説が上手だとか、議論が達者だとか言ふよりは、もつと情に篤いといふことが肝要である。「彼岸の牡丹餅やつたり取つたり」といふ古諺があるが、共存共榮を筆舌で宣傳するよりは、この親切の籠つた情愛の交際が農本生活の本來なのである。然も近來の農村生活の實際を見るに、憾むらくはかゝる昔ながらの理窟抜きの溫い情愛が失はれつゝあるではあるまいか。

此の頃聞いた面白い話がある。

子供が川に這入つて遊んでゐるのを見た母親が、

「あんよを冷やすと、夜おしつこが出るから上りなさい。」

といつた。すると現代的の浮佞娘が側から威猛高に、

「そんな舊式な物のいひ方をするから、古き女性は駄目です。」

ときめつけた。母親はびつくりして、それでは何んと言ふのが新しい物の言ひ方かと尋ねると、

「一對の歩行機關を、冷却せしむれば、腎臓の排泄機能に障害を來して、夜間放尿するが故に上りなさい！——かういはねばなりません。」

と言つたと。笑へぬ笑話である。近代の學問の弊に陷つた私共には、

不知不識（しらずしらず）の間に、この「一對の歩行機關」流の物の言ひ振りがあるではなからうか。伊藤博文が晩年側近の者に、「俺は總理大臣に幾回かなつたから、復たされてもどうやら勤まる自信があるが、生れた故郷に連れて行かれて村長になれと言はれては、果してうまく行くかどうか自信がない」と泌々述懐されたといふことであるが、味ふべき言であると思ふ。農村は決して理智的な議論と論文とのみで治る處ではない。澁茶を飲みつゝの溫い情話座談――それにも增して濃やかな情愛の交りそのものが物言ふ處なのである。

古人の金言を靜思す②
～朋有り遠方より來る、亦樂しからずや～

三浦　夏南

子曰、學而時習之、不亦說乎。
有朋自遠方來、不亦樂乎。
人不知而不慍。不亦君子乎。（學而第一第一章）

子曰く、學びて時に之を習ふ、亦說（よろこ）ばしからずや。
朋有り遠方より來る、亦樂しからずや。
人知らずして慍（いか）らず。亦君子ならずや。

「朋は同類なり」と集註にある。この同類について淺見絅齋先生は「まず類を同じくすると言へば、皆道に志し義理を學ぶ、同じたちなものから言ふことなり。ちやうど我と學も合ふて、我に心服して膚が合ふゆえ同類と言ふなり。同類と言ふて、いかう思ひ入れのあることなり。」とある。朋とは一般的に言ふところの友達ではなく、義理を學び、志を同じくする同志を意味するものであり、先生も言はれるやうに「思ひ入れ」のある言葉である。今の世にこの朋一人を見つけることの如何に難いことか。馴れ合ひの友、利害の友は數知れずあれど、道を以て相語り、義理を切磋琢磨する同志のなきことは實に寂しいことである。鄕土の自治は崩壞し、家族は解體され、道を求むる正學の衰ふる時、現代人を襲ふものはこの寂しさであり、孤獨である。賴るべき家族もなく、信ずべき心友もない。その言ひやうのない虛無が人を無限の利益の追求へと驅り立てるのである。その虛無の時代に確然として立ち、正學に志し、眞の同志同友との結びより全てを再生せねばならない。

その得難き同志が遠方より來るとある。集註には「遠方より來れば則ち近き者知るべし。」とあるやうに、學びては習ひ、至誠と實行を積むうちに自づからその影響は周圍に及び、つひには遠方よりはるばる同志が訪れて來るやうになる。近き緣も勿論有難いが、遠き緣には一層の神妙さを感ずるもので

ある。人と人との出會ひはむすびであり、むすびの大神の御神德である。人と人とが道によつて結ばれる時、前段の悅びは發して樂しみとなる。集註に「說は心に在り、樂は發散して外に在るを主とす。」とある。この樂しみこそ道を學ぶ者のみが得ることの出來る眞の樂しみであり、この樂しみに至る爲には不斷に學びては習う修身に勵まねばならない。

竹葉秀雄先生の三閒村塾、安岡正篤先生の農士學校を慕ひ、其を現代に再生せんと學と農に勵む有志は愛媛縣の我々だけではない。全國に同じ志を持つ同志は存在し、それぞれの活動を展開してゐる。まさに朋有り遠方より來るの言葉通りであるが、先日も兵庫よりはるばる學生が我々の農園を訪れてくれた。山崎闇齋先生のお生まれになつた村を故鄕とする青年で、崎門學を學んでゐると言ふ。得難きむすびの緣である。我々もまた同友を求めて、全國の同志を遠方より訪ひつつある。來月十二月には三重の碩學をお訪ねすることとなつてゐる。竹葉秀雄先生三閒村塾の精神は表面上には目立つて現れて來てゐないが、確實に神州の地下を流れ、また芽を出さうとしてゐることを肌で感ずる。この構想は昭和に消えかかつたやうに見えるが、現在最先端を行く活動のやうに思へてならない。世は靜かに然しながら着實にそちらへ向かひつつある。遠方より朋來ると內に思ひつつ、今ここに努力することこそ根本ではあるが、遠方よりまだ見ぬ朋を求めて全國を旅することも亦樂しからずやではないかと、孔子の聖言を拜しつつ思ふのである。

★活動報告

・十一月十三日（火）勉强會『農士道』を開催。
・十一月二十三日（金）大和神社にて秋の大祭を擧行。
・十一月二十七日（火）勉强會『大學』を開催。

★今後の豫定

・十二月四日（火）十九時～二十一時　『農士道』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

・十二月十一日（火）十九時～二十一時　『大學』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

・十二月十六日（日）十八時～二十一時　第四十三回醒庵忌
松山市・友輪莊（松山市道後町二丁目一二―一一）

★一燈照隅　萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周圍の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆樣には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

・一般會員　三千圓
・贊助會員　一萬圓
・特別贊助會員　三萬圓
・支援會員　一萬圓